

日本語初級学習者による文字表記の誤りの特徴： 無意味語との比較から

著者	本橋 美樹, 石澤 徹
雑誌名	関西外国語大学留学生別科日本語教育論集
巻	25
ページ	15-23
発行年	2015
URL	http://id.nii.ac.jp/1443/00007713/

日本語初級学習者による文字表記の誤りの特徴 —無意味語との比較から—

本橋 美樹

石澤 徹

要旨

初級学習者に「旅行」をひらがなで書かせると、非常に多くの学生が「りょうこ」と誤る。本研究はそのような表記にみられる誤りの実態を、音韻条件を変えた無意味語と比較することにより調査し、知覚との関連を調査した。その結果、既知語として答えた和訳テストでも、既知語かどうかわからない状態でのディクテーションで答えた場合も、「りょうこ」が共通する誤りであることが分かった。つまり、初級学習者は聞こえた通りに覚え、書いているのである。知覚と生成の先行研究において、生成とは発話データを指すことがほとんどであったが、表記も生成データとして精査すべきであることを提言したい。

【キーワード】 表記、音声、知覚と生成、拗音、長音

1. はじめに

1.1 表記と音声知覚

これまで知覚と生成の関係を考察する際には、聴取と発話のデータを比較する研究がほとんどであった（室井 1995; Flege 1991 など）。だが、学習者の様子を見ていると、表記も初級学習者の知覚の実態を知るための生成データであると感じるところがある。というのは、初級日本語学習者の多くの宿題や試験におけるひらがな表記において、共通の誤りのパターンがある。例えば、「東京」と初級学習者にひらがなで書かせた場合、「ときょう」と長音の母音が脱落して短音化したり、「趣味」の場合は「しゅうみ」と逆に長音化させる誤りが非常に多く見られる。このような誤りは、学習者がどのように日本語の音声を認識しているか知

る重要な手がかりである可能性がある。そこで、本橋（2012, 2013）において、学習者がどう音声を認識しているか考察する上で二つの生成面、つまり表記と発音の関連性を調べるため、初級学習者（アメリカ英語話者）から誤りの目立つ既習語の発音と表記のデータを収集し比較した。その結果、分析対象語ごとに見ていくと、表記に誤りがあった学習者のグループは発音にも同じような誤りが見られ、表記と発音という二つの生成面には強い関連があることが明らかになった。

さらに、本橋・石澤（2015）では、ひらがな表記の誤用と聴取能力の関係を調査した。調査協力者は上記の調査と同様に米語が母語の初級学習者であった。過去の宿題や試験などの産出データを参考に、誤りが多くかつ親密度の高い語である「教科書」「旅行」「図書館」など、主に特殊拍か拗音のいずれかを含む 15 語を分析対象語とした。データ収集は英単語和訳による表記調査、続いてディクテーションによる知覚調査を行った。データ分析の結果、ディクテーションと英単語和訳の正答率はほぼ同じ（60%前後）であり、個々の単語の正答率も同様であった。また、被験者一人ずつの結果詳細においても、例えば「旅行」を「りょうこ」と訳で書いた場合は、ディクテーションでも同じ解答をしている例が多く、特に全体の正答率が低い学習者のグループにその傾向が強く見られた。このことから、知覚と表記は強く関連している可能性があると思受けられる。

1.2. 表記における誤りのパターン

以下にまとめたのは、前述の表記に関する研究（本橋・石澤, 2015）において、多くの学習者に見られた誤りの例である。分析対象語は全て実験参加者が既習の意味語であった。

- 短音の長音化：

「図書館」→「としょうかん」、「宿題」→「しゅうくだい」、「去年」→「きょうねん」

- 長音の短音化：

「東京」→「ときょう」、「週末」→「しゅまつ」、「東京」→「とうきよ」、
「京都」→「きよと」

- 長音化と短音化が共起：

「旅行」→「りょうこ」

と、拗音と長音に関するものが多かった。

拗音の特殊性については先行研究で述べられている（城生・福盛・斉藤, 2011）のでここでは詳しく触れないが、日本語が母語の幼児でも習得が直音と異なるという報告もある（Tsurutani 2004）ことから、学習者にとって習得困難であることは予想できる。中でも、「旅行」を「りょうこ」とする誤りは非常に多いが、ラ行の拗音という英語には見られない音種が難しいのか、「りょうこ」以外にも「りよこ」「りょうこう」のように誤答パターンも様々であった。

上記で述べた筆者による表記に関する研究では、「なぜ」特定の語に誤りが多いのか、という検証には至らなかった。そこで、本稿では、第二言語としての日本語の音声の知覚と表記の関係を解明するための予備調査として、学習者がどのように誤るのかについて、網羅的な事例検討を行う。具体的には、初級学習者の表記の誤りと聴取による知覚のパターンとの関連があるのか、つまり「聞いたままに書いている」のかについて調査する。その際、アクセント型、子音種、母音種や語中位置などを変えた無意味語と比較することにより、なぜ誤りが多いのかを考察する。なお、その知覚データ収集の方法として本橋・石澤（2015）と同じく、ディクテーションを用いて結果を比較する。

2. データ収集

2.1 目的

本研究では、本橋（2012, 2013）において、特に誤りの目立った語である「旅行」に焦点をあてる。「りょうこ」の音韻構成を調整した無意味語の知覚の実態を、ディクテーションを通して考察する。また、以下に示す本橋・石澤（2015）で収集した英単語和訳の結果と比較する。

表1 「旅行」の和訳テストの結果（本橋・石澤, 2015）

正解率（人数）	誤答パターンとその割合（人数）
42%（14）	りょうこ 39%（13）、りょうこう 9%（3）、 りよこ 9%（3）

2.2 参加者

本橋・石澤（2015）と同じ、関西外国語大学の留学生別科に在籍中のアメリカ英語母語話者 33 名を対象にデータ収集を行った。日本語学習歴は平均 6 か月～1 年で、留学生別科において最上級をレベル 8 とするクラス分けのうち、レベル 2 に在籍していた。自国での日本語学習環境は様々であったが、二段階ある厳密なプレースメントテストによりクラス分けされているため、日本語能力はかなりの程度均質であると考えられる。

2.3 分析対象語

先行研究で最も誤りが見られた語のうち、「旅行」を取り上げる。「りょうこ」「りょうこう」とした誤りが多かったことを考慮し、「りょ」に焦点をあて、音韻構造を変えた無意味語 8 語と有意味語「旅行」の計 9 語を調査対象語とした（表 2）。

表 2 「旅行」を元にした調査対象語

調査対象語	音韻構造を変えた点
1. りょこう	——
2. りゃこう	母音種
3. りゅこう	母音種
4. りょ <u>う</u> こ__	音節構造
5. りょ <u>う</u> こう	音節構造
6. <u>た</u> りょこう	語中位置
7. りょこう（頭高）	アクセント
8. <u>り</u> よこう	直音
9. <u>る</u> こう	直音

2.4 手順

通常の日本語のクラスが行われている教室で実施した。上記の調査語 9 語と他 27 語⁽¹⁾の計 36 語を「これは____です」というフレーム文に入れ、無作為な順序で日本語教師である日本語母語話者（東京方言）の女性に二度ずつ読み上げてもらい、

録音した。フレーム文はシートに印刷してあり、調査協力者には単語部分のみを聞いた通りに書き入れるよう指示した。調査語が有意味語であるとは限らず、無意味語の可能性もあると説明し、スピーカーを通し録音した刺激音を再生した。全体で20分ほどを要した。

3. 結果と考察

以下に刺激語ごとの正解率(正解者数を参加者数33で割ったもの)を示す(図1)。なお、今回は事例検討のため記述統計を用いて分析する。また、左端の「★旅行(英訳)」は本橋・石澤(2015)で報告した有意味語の表記データを示している。

まず興味深いのは、本調査の結果においても、有意味語(「1. 旅行(ディクテーション)」)のディクテーションテストで「有意味語か無意味語か分からない」状態で書き取った場合の方が「★旅行(英訳)」よりも正解率が10%高いという点である。一方、英訳テストとディクテーションテストの「旅行」の結果では、どちらも一番多い誤りのパターンは「りょうこ」であった。その他、「りょうこう」「りょこ」など、誤りのバリエーションが多かったのも英単語和訳の結果と共通している。

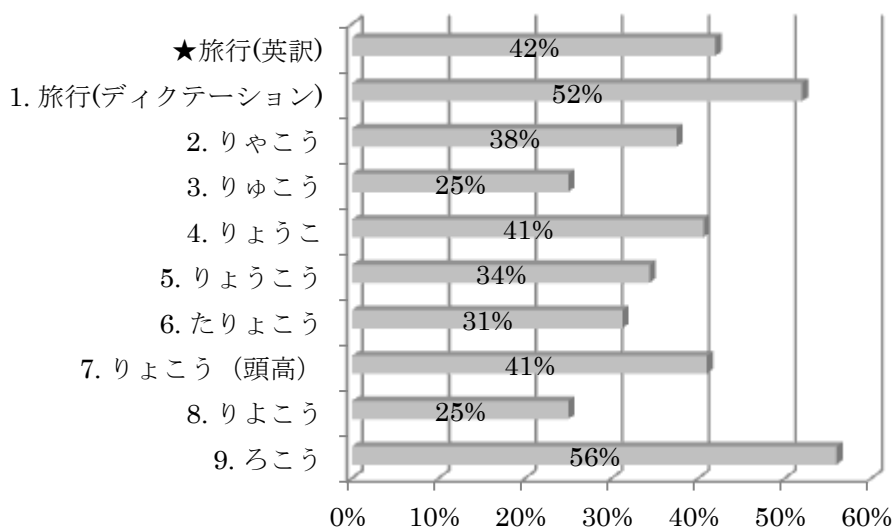


図1 ディクテーションテストにおける分析対象語ごとの正解率

次に無意味語の調査語ごとに結果を精査する。表3に各語と、誤りのパターンを

示す。3人以上答えたもののみ挙げてあり、()内に人数を示す。

まず、母音種を変えた「2. りゃこう」は38%と、有意味語の場合よりも正解率が低かった。誤りの中で一番多かったのは「りゃこ」で、語尾の母音が聞き取れないパターンであった。対して、有意味語の「りょうこ」のように拗音を長母音化した例（「りゃあこ」）は見られなかった。その他の誤りは、りゃっこ、びゃこ、りゃこ、やこう、など様々であった。有意味語の場合は大半の誤りが長音化だけであったが、今回の結果では、子音「り」の聞き取りも難しいようであった。また、同じく母音種を変えた「3. りゅこう」は正解率が25%にとどまり、上記と同じく語尾の短音化「りゅこ」が多くを占めていた。長音化「りゅうこ」、「りゅうこう」も見られたが、それぞれ2人(6%)、3人(9%)と少なく、やはり、りこう、びょうこ、りょうこ、びゅこう、りゅゆこ、りこ、れこう、など様々なパターンが見られた。本調査の結果によると、「りよ」は「りゅ」や「りゃ」に比べ、比較的聞き取りやすいようだが、長音化しやすく、それが正解率の低くなる原因となっている可能性がある。

表3 下位群における聴取と筆記の誤答一致例

調査対象語	誤答パターンと頻度
1. りよこう	りょうこ(3)、りょうこう(3)、りよこ(3)、
2. りゃこう	りゃこ(9)
3. りゅこう	りゅこ(5)、りゅうこう(3)、りこう(3)、りよこう(3)
4. たりよこう	たりよこ(8)、たりょうこ(3)
5. りょうこう	りょうこ(11)、りよこう(5)、
6. りょうこ__	りよこう(6)、りよこ(3)、りょうこう(3)
7. りよこう (頭高)	りょうこ(11)、りよこ(4)、りょうこう(3)、りよこう(3)
8. りよこう	りよこ(6)、りょうこ(4)、りよこう(3)、りょうこう(3)
9. ろこう	ろこ(8)

では、長音の聞き取りはどうであろうか。「4. りょうこ」の正解率は41%で 和訳の「★旅行」と変わらない。さらに興味深いことに、一番多い誤りは「りよこう」

の6人(19%)であった。つまり、初級学習者にとっては、長音は聞き取れるものの、どこに長さが割り当てられているのか瞬時に判断できない、という状況である可能性がある。この現象は先行研究でも報告されている(畑・山下, 2010)。つまり「りょこう」も「りょうこ」も区別できない状態なのである。また、「5. りょうこう」と語尾も長母音化され、拍数が増えると正解率が34%と下がる。語尾の長音が聞き取れない誤りが11人(34%)と多く、さらに「りょこう」と答えた誤りも5人(16%)おり、長音がどこに含まれているかを認知することへの負担がさらに増えることが伺われる。

では、語中位置はどうか。「りょ」が語頭だから難しいのか。しかしながら、「6. たりょこう」の場合、31%(10人)と低く、さらに、一番多い誤りのパターンが「たりょこ」8人(25%)と、語尾の長音の聞き取りが難しい、というのは他の場合と変わらず、語中位置は関係がないようである。

アクセントの影響はどうか。東京方言では「りょこう」は平板型だが、「7. りょこう」は「りょ」に高音が置かれる頭高で発音したものを聞かせた。結果は正解率41%と、英訳の結果とほぼ変わらず、初級学習者の長音の認識にアクセント型は影響しない、という小熊(2000)の研究結果と一致する。

最後に、拗音であることが難しさの原因なのか検討する。「8. りょこう」は直音であるが、正解率は25%と低い。「りょこ」と、他の例と同じく語尾の長音が聞き取れない誤りが見られるが(19%、6人)、その他の誤りは「いよこ、びようこ、びようこ」など/ri/の聞き取りができていない例も多く見られた。一方で、「りょ」とは全く異なる音素を用いた「9. ろこう」においては正解率が56%と高い。やはり多い誤りは「ろこ」など、語尾の長音の聞き取りができない例であった。

以上のことより、明らかになったことを以下にまとめる。まず、「旅行」のひらがな表記が難しい一番の原因は、語尾の長音の聞き取りにあるのではないか。そして「りょうこ」とする誤りが多いのは、長音が聞き取れても、その長音がどの音節に割り当ててるのかわからず、聞き取れた/ryo/音であると思ってしまったことによると予想できる。また、母音種やアクセント型による影響は見られなかった。

このような結果は先行研究で明らかになった、学習者の知覚の特徴と一致している。ディクテーションには、聞いてから書き取るまで、①音の聞き取り、②音から意味の認識、③認識した語の表記、という三段階がある(畑・山下, 2010)。最終ア

ウトプットである表記に誤りがある場合、各段階のどこかで誤りが生じていることになるが、表記を見るだけでは、どの段階で誤りがあるのか知るの難しい。しかしながら、本研究で用いるディクテーションは、被験者には無意味語か有意味語か分からない状態でランダムに読み上げられた語を書き取るものなので、意味の認識という過程は経ず、直接音の聞き取りから語の表記へ通じているはずである。単語として学習する場合には、学習者は自分が聞こえたと思った通りに語彙を心内辞書に貯め、発話と同様に表記している可能性が示唆されたと考えられる。

4. まとめ

本研究では、初級学習者が「旅行」とひらがな表記する上で、なぜ「りょうこ」のような誤りをよく犯すのか、「旅行」の音韻構造を変えた無意味語を用いたディクテーションテストを通して検証した。その結果、既知語として出題した和訳テストで引き出した場合も、既知語かどうか分からない状態でのディクテーションで引き出した場合も、「りょうこ」が共通する誤りだった点から、初級学習者は聞こえた通りに覚え、書いているということが分かった。ディクテーションを用いた研究は中上級者のリスニング能力を中心に研究されてきているが、日本語学習者、さらに初級者の語彙レベルでの知覚調査に用いられた例は管見の限り、ほとんど見られない。ディクテーションが初級学習者の知覚の実態をどれだけ正確に把握できるか、つまり本当に「聞こえた通り」であるかどうかをさらに調査することを今後の課題としたい。例えば、ABX 弁別法などを用いた聞き取りテストと無意味語のディクテーションの成績に何等かの相関があるか等を検証したい。

また、表記が発話と同様に精査すべき生成データであり、また知覚と深く関連していることが先行研究同様、明らかになった。初級の段階で、表記の誤りから発音と聴取の誤りに気付くことにより、他技能を同時に向上させることができるのではないだろうか。今後はこのような教育的効果についても調べていきたい。

注

- (1) 「旅行」のほか、「宿題」「去年」「一緒」も同様に無意味語を用意し、比較のためのデータ収集も同時に行った。結果については現在分析中である。

付記と謝辞

本研究は JSPS 科研費 26370621 (研究課題:『文字表記の誤用と音声知覚の関連性』) の助成を受けたものである。調査に協力して下さった学習者の皆さんに心より御礼申し上げる。

参考文献

- 城生 佰太郎・福盛 貴弘・斎藤 純男 (2011) 『音声学基本事典』 勉誠出版
- 鶴谷 千春 (2008) 『第二言語としての日本語の発音とリズム』 溪水社
- 室井 幾世子 (1995) 「英語母語話者の日本語の特殊拍の知覚と産出に於ける諸問題」
『Sophia Linguistica』 第 38 号 pp. 45-54
- 畑 ゆかり・山下 直子 (2010) 「語彙指導を目指したカタカナ語の御用に関する分析—留学生に対するディクテーション調査から—」『香川大学教育実践総合研究』
第 20 号 pp.25-32
- 本橋 美樹 (2012) 「日本語学習者による文字表記の誤用と音声知覚の関連性」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』 第 22 号 pp. 53-62
- 本橋 美樹 (2013) 「文字表記の誤用と音声知覚の関連性」『2013 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』 pp. 224-229
- 本橋 美樹・石澤 徹 (2015) 「JFL 学習者による特殊拍と拗音の知覚と生成—生成データとしての文字表記の考察—」『第 29 回日本音声学会全国大会予稿集』pp.48-53
- Flege, J. (1991). Perception and production: The relevance of phonetic input to second language phonological learning. In T. Huebner & C. Ferguson (Eds.), *Crosscurrents in second language acquisition and linguistic theories*. Amsterdam: John Benjamins.
- Tsurutani, C. (2004). Acquisition of Yo-on (Japanese contracted sounds) in L1 and L2 phonology in Japanese Second Language Acquisition. *Journal of Second Language*, 3, 27-48.

(motohash@kansai.ac.jp)

(t.ishizawa@tufs.ac.jp)